CORE Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

札幌大学総合研究　第６号（2015 年３月）

〈論文〉

ひとりひとりの若者が自分の未来に希望を持てる社会へ

ＮＰＯ法人　Ｄ×Ｐ代表　今井　紀明

2014 年度第１回札幌大学附属総合研究所講演会

日　時　　平成２６年１１月１８日（火）　１７時～１８時３０分
場　所　　札幌大学プレアホール（２号館３階）
次　第
１　開　会　　濱田　英人　札幌大学附属総合研究所副所長
２　挨　拶　　山﨑　眞紀子　札幌大学附属総合研究所所長
３　講　演　　テーマ「ひとりひとりの若者が自分の未来に希望を持てる社会へ」
　　講師　今井　紀明　氏　ＮＰＯ法人　Ｄ×Ｐ代表
　　司会　瀧元　誠樹　札幌大学総合人間学類教授
４　質疑応答
５　閉　会　　濱田　英人　札幌大学附属総合研究所副所長

開会

司会：皆さんこんにちは。
定刻となりましたので，始めさせていただきたいと思います。
開会の辞を，札幌大学附属総合研究所副所長の濱田英人より申し上げます。

濱田：ただいまから，平成 26 年度第１回札幌大学附属総合研究所講演会を始めさせていただきます。本日は，ＮＰＯ法人　Ｄ×Ｐ共同代表の今井紀明さんをお招きし，「ひとりひとりの若者が自分の未来に希望を持てる社会へ」と題しまして，ご講演いただきます。

司会：続きまして，札幌大学附属総合研究所所長の山崎眞紀子より挨拶申し上げます。

山崎：こんばんは，高い所から失礼いたします。

総合研究所の所長を務めております山崎と申します。

本日はお足元が悪くお寒い中足をお運びいただきましてどうもありがとうございます。

札幌大学総合研究所は，札幌大学の研究力の向上と研究の公開を目指して 2009 年に発足いたしました。

現在は教育力の向上の研究にも取り組んでおります。

今年度の講演会は，中でもキャリア教育にポイントを絞りました。教育と言うとつい上から目線になってしまいがちなんですけれども，このたびフレッシュな今井紀明さんという若い方を講演会にお迎えすることができまして，大変光栄に存じます。

現在悩みを抱えている若い人達に向けて，キャリア教育プログラムやチャレンジプログラムを展開していらっしゃる上での貴重なお話を伺えると思ってとても嬉しく思います。そして今井さんがお育ちになった札幌というこの地で貴重なお話を伺えるということも大変光栄に存じます。

今井さんがこれまで活躍なさっていたこと，非常に胸が熱く思うんですけど，今日は貴重なご経験を通して感じたこと考えられたこと，お話が伺えるかと楽しみにしております。

どうぞ今井さんよろしくお願いします。

みなさまご来場本当にありがとうございます。

司会：講演に入ります前に，一つ皆様にお願いがございます。

　本日の配布資料をご覧ください。一枚捲っていただきますと，二枚目に質問票を用意さ

せていただいております。こちらは，これからご講演をいただいた後に質疑応答の時間を取りますが，挙手をもってするのではなく，こちらの質問票に記入いただいた物をもって行いたいと考えています。そこで，講演内容についての質問やコメントのある方は，ご記入ください。講演終了後の休憩時間に質問票を回収いたします。その後，そちらの質問用紙にそって質疑応答させていただきます。

重ねて，質問票の中段以降は，今後の講演会を開催するにあたっての参考とさせていただきたい項目となっておりますので，こちらにもご記入をよろしくお願いいたします。

申し遅れましたけれども，本日の司会を務めさせていただきます札幌大学の瀧元と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは，今井紀明さんにご登壇いただきます。よろしくお願いいたします。

今井紀明氏　講演

みなさま，こんばんは，NPO法人D×Pの今井と申します。今日はよろしくお願いします。やっぱり札幌は寒いですね。今は，大阪に住んでいるので札幌に来ると大阪との寒暖差にやられるような感じになってしまいました。もう10年くらい札幌に住んでないので。

実は，こういった場で，学生さんの前でお話する機会というのがほとんどないので，今日はすごい楽しみにしておりました。こういった場というのは，舞台の上で観客席にみなさんがいるというスタイルということです。なんだか，本当に高い所から申し訳ないんですけれども。是非ですね，こういう場でも少し質問とか色々していただいて，お互いに学びの場になればいいなという思いで今日は来させていただきました。ですから，講演も

50 分くらい話をして，その後には質疑応答の時間もとっていただきましたので，よろしくお願いします。

本題に移る前に聞きたかったんですけれども，今日大学 1 年生はどのぐらいいますか？1 年生は 3 人ですか。それでは，2 年生は？結構多いですね。3 年生・・・。4 年生・・・院生もいるんですか？わかりました。あとは教員の皆様とか，一般の方ですね。

今日の話題は，僕の経験と，NPO 法人 D × P としての事業の話を少ししていきたいなと思っています。NPO 法人 D × P はですね，今現在，社員は 4 人で，その他にボランティアスタッフとインターンスタッフも含めては 11 名で今は仕事をしています。今年で 3 年目の NPO 法人です。だいたい年間 500 人ぐらいの高校生たちと長期間関わりながら仕事をしてるという形になっています。

どういった事業をやっているかというと，大学とか専門学校での中退予防の仕事というのもしてるんですが，特に最近注目をされているのは，通信制高校に対してのキャリア教育事業ですね。これが最近メディアの方とかにも取り上げられてきています。

さて，通信制高校のことどれくらい知ってる方はいらっしゃいますか？通信制高校のことを知ってる方，挙手してもらえますか。まあまあいますね。それでは，仕組みまで言える方は，どれくらいいらっしゃいます？この間聞いたぐらいの大学生がちょっといると思うんですけれども。もしよかったらそこの男性の教員の方，通信制高校ってどんな生徒が通っているイメージあります？

会場：通信制高校ですか？

今井：はい，先生の世代的に言うと。

会場：私たちの世代的には，中学校卒業後に就職した人たちがあらためて高校卒業資格を取るためや学び直しを求めているケースが多いように思いますが。

NPO 法人 D × P の活動について

今井：そうですよね。たぶん先生の世代だと勤労学生が多かったイメージがあると思うんですね。確かに，以前は勤労学生が多かったんです。ただし現代になってくるとですね，だいたい 7 割の生徒が高校を中退した生徒となっています。4 割くらいの生徒が中学校までに不登校の経験をしてる生徒ということです。約 19 万人くらいの生徒が通信制高校に在籍しています。日本社会としては少子化傾向なんですけれど，通信制高校の生徒数は増

えているというのが実態となっています。

そこの状況がどういうところかと言うと，2 人に 1 人が進学も就職もしない。この 10 年くらいで，こうした課題というのが出てきているのですが，あまり知られてこなかったのです。そこで，私たちは，卒業後に無業者にならない，ニートにならないためのキャリア教育事業が必要だと感じて，D × P を始めたのが 2 年半前です。

関西で事業を始めていまして，大阪と京都にある 11 校の高校と関わっていて，年間 500 人ぐらいの高校生たちと長期間関わり，彼らの自立を先生方と一緒に担っているという形になっています。そういったことが，今非常に評価を得ていて関西の方では少しずつ進んできているという形になっています。

さて，僕は，このように仕事を始めていったというところなんですけれども，僕の前職はなんだと思いますか？そこの黄色い女性の方，何だと思います？

会場：10 月に「きたえーる」での講演会に参加していたので，そこで聞きました。

今井：あ，この前聞いたんだ。全然聞いてるんだね。なるほどなるほど。じゃあちょっと知らない人にあてるわ。来てない学生さんで，じゃあそこの 1 年生の子，髪の長い子。

会場：営業。

今井：あ，でも営業は合ってる確かに。すばらしい。営業は確かに合ってる。でも，営業なんですけれども，業界的にはどんなの感じる？

会場：貿易。

今井：たこ焼き？

（笑い）

今井：あ，貿易？今めっちゃびっくりしました。関西から来たからたこ焼きって聞こえたんですよ。貿易ですよね。すみません。貿易関係です本当に。だから食肉とか水産の業界だったんですね。たとえば食品関係です。特に食肉が得意でですね，海外のたとえばカナダとかアメリカとかそういったところからトレーダーとしてかなり大量に肉とかを仕入れて，それを国内で流すような仕事をしていたんですね。だから貿易で合っています。

けれども，それではそういった人間がなんで教育関係の仕事に就いたかというと，やっぱり僕の昔の過去が影響しています。たぶんもう皆さんも知っていると思うんですけれども，この事件がやっぱりきっかけで実際あったんですね。

「人質事件」でのこと

10年前のこの事件覚えている方どのくらいいらっしゃいますか？たぶん知っておられる方のほうが多いなと思うんですけれども。10年前，僕はイラクの子どもたちの医療支援のNGOをですね，札幌で始めていました。当時，現地のNGOと一緒に子どもたちのことを何とかしたいという活動をしていたんですけれども，そこで「人質」になったという過去があって，これがきっかけになって今のNPO法人の仕事というのを実は始めています。

当時は，やはりかなり厳しい状況でした。どういう状況で捕まったかというと，ちょっと端折るんですけれども，ロケットランチャーって皆さんわかりますか？僕たちは車に乗っていてガソリンスタンドで給油していたんですけれども，目の前というか前の方にそれを持った兵士がいて，さらにサブマシンガンを持った兵士が左の方にきて，どうも道路脇に行けと指示されました。そして，そこにいた群集に囲まれて捕まりました。今日は時間があまりないのでそこまで詳しくは話せませんけれども。当時そこですごいびっくりしたのは，最初捕まった時は，皆さんよりも年下の少年兵の子たちが僕のパスポートとかを取って，取り調べられた状況がありました。最初はやっぱり死ぬかと思いました。爆弾を体に巻いた兵士が2人いて，車を発車させると，僕ら後部座席にいたんですけれども，アメリカ軍に突っ込むというふうに言われていたんですね。ですから，最初は死ぬかと思っ

たんですけれども，この通り生きているという形でしたね。それから後の 9 日間，拘束されました。9 日間というのがなかなか大変でした。この写真では 1 番上が僕ですね。首をナイフで突き付けられているのが僕です。

あっ，あんまり皆，深刻に取らないでくださいね。全然，今は僕大丈夫なので，この映像見ていても。とは言っても，もちろんしんどかったんですよ。「しんどかったんですよ」と，一言でまとめられませんけどね。ただあの時の 9 日間，実際この経験自体は実はそこまで僕にとっては，トラウマ体験にはなってはいたんですけれども，なんていうんですかね，そこまで記憶が消されるほど辛い経験ではなかったというのが実際あります。

それよりもきつかったというのが，この事件の後の状況でした。それから 4，5 年間ほどですね対人恐怖症というか引きこもりとかになっていた時期がありました。それがですね，やっぱり僕が今の仕事に関わっている理由に繋がっています。ちなみに言うとこの 9 日間の拘束の後，僕たちはドバイで収容されて，そこで PTSD というふうに診断されてるんですが，その後起こったというのが解放の報道の時とか，そして批判の報道ですよね。

10 年前のことですけれど，大学生の皆さんって，この間来た生徒さんは別ですけれども，覚えています？この事件のこと。覚えていないよね，やっぱり。今の大学生って覚えていないんですよ。覚えていない人のためにもう少し当時の状況を簡単に説明していきますけれど。

この時，本当に報道がすごくてですね，1 ヶ月間ぐらいテレビで報道されない日はなかったぐらい報道されているわけです。解放された時のイメージとしては，たとえば全然違う番組だったのに，速報が字幕で流れるのではなく，画面が突然切り替わって解放の映像になるみたいな状態だったらしいです。僕は全く知らないのですけれども。それぐらい注目された事件だったらしいんですね。この写真，ちょっと自分の顔をここで見るのは恥ずかしいですけれども，これが僕だったらしいですね。「らしい」って言うのは変ですけど。ただですね，やっぱりすごく難しかったのが，この時「自己責任」報道というのがあって。そして本当に誤報が多かった事件でした。皆さん何が一番の誤報だったかってご記憶にありますか？どうでしょうか。

あの自己責任報道は確かにあったんですけれども，それよりもすごい誤報とか大量にあって，「自作自演」って覚えてます？この事件は，彼ら自身が作った事件だというようなことがまことしやかに新聞一面とか，テレビのワイドショーのトップに出るくらい報道されていたんですね。それプラス大量にいろんな誤報が出ていました。それなので非常にそういう意味ではバッシングもやっぱり強まったというのもありました。家族の言動とかも捉えられたというのもありましたけれども。

話が前後しますけれど，僕らが解放された後，現実味が全くなかったですね。というのが解放された時に，先ほどドバイに行ったって言いましたけれども，うちの兄が来ていて，その兄が最初に言ったのは，「うちの家族は全員仕事を失う可能性がある」というふうに言われて，「なんのこっちゃ？」と最初思ったんですけれども，帰ってきた時にそれを知った，と。どういう状況になっているかというのを少しずつ知り始めた，ということです。ただ，現実味がありませんでした。この写真は，事件から2週間経った後です。記者会見に出ました。なんとか自分たちのことを「ちゃんと話さなきゃいけない」というところだったんですけれども，時，既に遅しでした。300人ぐらいの報道陣に囲まれてやっていたという感じの時でした。

やっぱり，すごく精神的にどんどん病んでいくんですね。あの大変だったというのが，まず事件でPTSDって診断された時に普通だったら拘束だけの体験だけでもストレスがかかっているので，何らかの形でストレスが出てくるかなと思ったんですけれども，その時僕が出たのが赤い斑点でした。左半身がずっと赤い斑点がでてきて止まらないみたいな感じの状況だったというのがまずありました。プラス，にもかかわらず現実感を伴わない。こういった有名になること起こっていて，皆さん有名になるっていうことがわかりますかね。あんまりイメージつかないと思うんですけれども，僕の顔って何回も言うんですけれども，特徴的じゃないですか。パーツパーツがはっきりしてますよね。たぶんそう思うと思うんですよ。すぐ覚えられるんですよ。

で，どうなるかと言うと，たとえば澄川駅あるじゃないですか。自分がここからバスで行ってとかですね，あとそれで澄川駅の地下鉄乗りますと，そうしたら9割以上の人からまず視線を浴びる。さらにそこで声をかけられる率が1時間のうちに10人とか20人単位でくるわけです。あの時この事件で言われたのは，応援されることが僕は駄目だったんですけれども，「今井さん頑張ってください」というふうに言われるとすごく嫌な気持ちになったりとか，逆に批判，「糞ガキ死ね」というふうに言われたりとか。あと狸小路を歩いていたんですけれども，突然，若い社会人に殴られたこともありました。こういうようなことも結構あってしんどかったんですね。やっぱり報道がすごいやっぱり強くてで。どれだけ批判が来たかというと，この写真のような状況だったんですね。これは批判の手紙です。「謹んでご冥福をお祈りします」とかですね，あとは「目がキモい」とかですね，どうでもいいじゃん，みたいないうようなことがたくさんあるわけですよ。

みなさん笑ってくださいね。ちょっとこのホールがさっきから暗いムードなんですよ，なんとかしたいと思っているんですけれども。

ちょっとこの写真は，下が見えないんですが，「ハゲ」って書いてあるんですね。「なん

でハゲやねん」とか思うんですけれども。そういうこと書かれて今ではすごい鍛えられたなと思うんですけれども，当時はやっぱり難しくて。18 歳だからちょうど皆よりも年下くらいの年齢の時にこの事件があったので，そういう意味では精神的にやっぱりやられましたね。

やっぱり有名になって，たとえば報道関係者とか大量に家の周りにいたので，カーテンを閉めなきゃいけないんです，朝から晩まで。それでずっとその状態にいったらやっぱり精神的におかしくなっていきますし，あとそれで何とか自分たちとしても釈明というかですね，ちゃんと自分たちのことを説明したいと思ってテレビ報道受けたとしてもへこんだりしました。あとは何回かだけ講演をしたことがあったんですけれども，そこでまた応援されるのもすごい苦手だったというか，駄目だったので精神的にきつかったので，すごいやっぱりしんどかったですね。

転機のおとずれ

ちなみに，応援される方の手紙が大量に来ていたんですけれども，それを返せ始めたのは事件から 9 年後，去年でしたね。すごく難しかったです。

話を続けると，ちょっと時間がないのでちゃんと話を続けていくとですね，その後僕はけっきょく国外逃亡します。全然日本に住めなかったので，なんとかですねイギリスで潜伏生活みたいなことをしていました。逃亡者ですね，簡単に言うと。あの感じだったんですけれども，でも，そこでも解決しないんですね。1 年間くらい海外にいたんですけれども，日本人がいない所で働いていました。まだ英語を喋れたので良かったんですけれども。それでも，けっきょく日本人からいろいろちょっとやられてですね，やられてという言い方は良くないですね。日本人で僕のことを支えてくれる人もいたんですけど，結構やっぱりいろんな方もいたので，あんまり解決にならなかったんですね。

そこで，事件から 1 年後ぐらいですね，僕がとった行動というのが批判をした人たちのことを理解するために，さっきの写真で手紙がありましたよね，あれを全部返していって，プラスその人達に会いに行くというようなことをやっていました。批判の手紙とかもですね，全部で 5 万 5000 通くらいあったんですけれども，それを全部タイピングして彼らの言っていることを理解しようと思いました。そして，話をしていくという。そういうことをブログに書いていった結果，知っている方はいると思うんですけれども，ブログが炎上したんですね。はい，ブログが炎上したんですよ。もう結構これもすごくてですね，事件から 2 年経った後なんですけれども，これが一つの転機なんですけれども，批判のコメントが 6000 件くらいきていたんですね。1 日のアクセス数が 30 万件ぐらいあってですね，非常

にしんどかったんですけれども。

2年経って1つ良かったのは，これ全部誤報に基づいて批判されてきたものだったことですね。そうだったので，批判全部に，丁寧に返していったらインターネット上での批判というのが全部消えていったんです。それとメールを送っていただいた方には電話番号を公開しますって言ったんですね。そうしたら大量に電話がきたんですけれども，ほとんどの方が味方になってくれたんですね。そうだったので，まずインターネット上でのコミュニケーションというのがここでは良くなりました。

ただ問題だったのが，この後はリアルな関係についてです。大学生の皆さんにとっては，僕のスタートというのは遅いと思います。21歳の時に大学に入りました。ただし，大学でも疑心暗鬼になるわけですよ，簡単に言うと。炎上した後の感情ってわかります皆さん。本当に人のことが信用できなくなるんですよ。ただでさえあの事件の後，人と接しられないのに，より一層人と接しられなくなる。僕は，APU，立命館アジア太平洋大学という別府にある大学に行っていたんですけれども，最初から噂にはなっていたんですね。「あの今井君が来る」みたいな，「あの人質だった今井君が来る」みたいな形で，この当時まだ顔も知られていたので，というか全員覚えているんですよ，色んな人が。だからよく声をかけられるのですけれども，「自分はあの今井じゃないです」みたいなこと言って拒否してしまう。誰から見ても「お前，あの今井やん」みたいな感じなんですけれども。よくわからない状況に陥っていました。

それだけ自分の過去というのを切り離したいというような状況だったというのか，だからもう分離していました。そういう意味で言うとね。これは，大学での仲間たちとの集合写真ですけど，みんなはすごく楽しそうじゃないですか。左から2番目が僕ですね。で，僕はすごく分裂しているじゃないですか。だからこれだけハブられてるわけですよ，簡単に言うと。正直ここから回復するというか，大学の3年生とか4年生になって僕は精神的に回復していくので，本当に最初の1年目，2年目というはしんどかったですね。たぶん「誰やこいつ」とか思われていたと思います。「なんでこいつ隠すんだ」みたいなというふうにちょっと思われたんじゃないかなと思いますね。

それでは，どういうふうになって回復していったかと言うと，本当に友達の影響なんですね。この写真はが，朴 基浩という在日の子なんですけれども，今のD × Pの共同経営者です。一緒に活動しているメンバーです。彼とかですね，あと後輩たちのおかげによって精神的に回復していきます。どういうことかというと，ちょっとかなり短縮するんですけれども，僕がたまたま彼に愚痴を言った時があるんですよ，あるシチュエーションで。「国民の半分ぐらいから否定された気持ちってわかるか」というようなことを彼に一回愚痴で

言ったことがあって，その時に彼が言ってくれたのは，「いや確かにわからないかもしれないけれども，でもけっきょく解決というか向き合わなきゃいけないのは自分だよね」みたいなことを言われたんですね。「確かにそうだな」というふうに思って，そこから自分の行動を変えていったというか，ちゃんと自分の話をする，自分の過去を受け止めるというか自分の過去の話を逃げないように切り替えました。プラス，もう一回海外に行くことにしました。

やっぱりこの事件の後，僕まだ事件から3年経った後も叩かれていたんですよ。週刊誌にも叩かれていました。「あの時の今井君は今」みたいな特集が出るわけですよ，週刊ナントカとかで出るわけです。だから，何かあったら叩かれるかもしれないというふうに思っていたので，なかなか自分で行きたい所に行けなかった。行けなかったけれども，でもそれをなんとかしたかったです。だから，28カ国くらい，いろいろ周りました。最後はアフリカとかにも行っていました。そういうふうに精神的に回復していきました。

精神的に回復していって，それでたまたま大阪に来るわけですよ，就職で決まった会社というのが大阪だったんですね，それも本当にたまたまでした。ただ単に決まった会社というのがそこにあっただけだったので，何も縁もない大阪に行ったわけですけれども，でも就職と同時に何か若者というか自分の年下の子たちのために出来ないかなと思い始めたんですね。というのがやっぱり後輩たちに救われたし，プラス自分としてもアフリカに行った後ザンビアという国で実は3ヶ月間ぐらい小中学校の増築の仕事をやっていました。

そこで，ザンビアの子どもたちよりも日本の子どもたちの方がまずいと思ったんですよ。その時にちょっといろいろ理由があって。それで，なんか日本の子どもたちのために出来ないかなと思い始めて，商社に入ったと同時にたとえば休みの日とかですね，あとは仕事が終わった後とかに学校の現場とかを回り始めました。そこで，たまたま通信制高校の子たちと出会うんですね。通信制高校の子たちって先ほど言ったとおりです。どういうことかというと高校中退とかですね，あと不登校の経験者がすごく多い，と。実は統計上さっき4割と言いましたけど，文科省のデータにあんまり出てないので，今年うちが大規模な調査をしているんですけれども，本当に多いんです。その子たちとやっぱり自分が重なったというか，やっぱり彼らも結局周りから否定されてきている生徒がすごく多かったんです。自分もやっぱり周りから否定されてきたっていう想いがすごく強かったので，なんとかこの子たちのためにしたいというふうに思ったのがきっかけで調べ始めました。

進路未決定という問題

ここからは，事業の話になるんですけれども，通信制高校ってどんな所にあるかというと，

最近はこの写真のようなビルの一室にあります。65% が私立の学校なので，こういう所にたとえば週１回とか，学校にも本当によりますけれども，月１回とか，場合によっては年何回かしか通わなくても高校卒業資格が取れるのが通信制高校です。そこの現状がどういうことかというと，通信制高校の高校生の２人に１人が，修了後は進学も就職もしないという現状に実際なっています。これは本当に最近まで知られていなかったですし，通信制だけでなく，定時制も同様です。実は，通信制と定時制と両方に関わっている NPO というのがほとんどないので，そういう意味では D × P は結構稀有な NPO ですね。とにかくこうした問題は最近出てきたので先生方と一緒にこの子たちのためになんとか動こうという形になっています。

よく定時制高校の方が結構しんどい生徒が多いんじゃないかというふうに言われます。確かに定時制高校の方がしんどい生徒はいることもあります。たとえば生活保護家庭が多いというのもあるんですけれども。通信制高校のしんどさといいますか，問題点は進路未決定，つまり進路が決まらないまま卒業する生徒が割合高いのです。その割合は 44.5% です。かなり多いです。このグラフを見ていただくとわかるかと思いますけれど，日本社会としては少子化傾向にありますが，唯一在籍者数が伸びているのは通信制高校です。定時制高校は公立がほとんどです。だからたとえば県とか府とか都とか，そういったところから就職とか進学とかのサポートが少しですけれど付きます。いろんな業者に頼んで。ただ通信制高校は，半数の学校が私立で，比較的新しい学校ですので，そういったサポートがなかったんですね。だから，ここをターゲットに絞って最初はやろうというところで，うちの事業を始めていきました。

進路未決定の原因ってなんだと思いますか？これに関してはあまりイメージがつかないかもしれません。不登校という言葉に対して年代によってイメージが少し違うかもしれないですけれども，今はみなさんそれぞれでかまいませんから中学３年生の自分をイメージしてください。そして，たとえばいじめが原因で不登校になりました。１年間家にいました。すると，親から，「高校の卒業資格は取りなさい」というふうに言われて通信制高校に行きました。それで，通信制高校で週に１回とか月に１回とか通います。卒業資格は取得できるかもしれませんが，進学とか就職になるきっかけがあると想像できますか？クラスもあまりないところもあるので，なかなか友達もできません。自分でアルバイトできるのなら別ですよ。でもそういう子ってなかなかそういう自己肯定感が低かったりとか，いじめを受ける経験があったりして，高校進学できなかったり高校中退した生徒は，通信制高校に変えたとしてもなかなか就職意識は高まらないですよね。だから，進路未決定の率が高くなるわけです。

生徒や先生がたと話をしている中で，人との繋がりがなかったりとか，あと成功体験がなかったりとするところに原因があることがわかりました。プラス「尊敬できる大人に会えない」,「大学に行きたいと思っていなかった」というところもうちの生徒が言っていました。こういうふうなところが結構あるなと思います。

たまたまですけれども，僕が商社時代に通信制高校と関わりをもちました。総合学習の授業がありますけれども，その授業時間を使わせていただいて，授業を繰り返していくうちに高校3年生全員が進学を決めていったんですね。そこで，僕たちの行った授業をなんとか体系化というかプログラム化して学校に提供していこうといったところがD×Pの始まりと言えると思います。

D×Pプログラム「クレッシェンド」

それでですね，今はクレッシェンドというプログラムを通信制高校で提供しています。これが思いのほか実績が出ていて，去年は5校120人くらいを提唱にしか提供出来なかったんですけれども，今年は11校になりました。関西，大阪と京都。あと実は札幌の大通高校にも少しだけ関われるようになってきました。大通り高校では少し別のプログラムを展開いるのですけれど。今は年間500人くらい関わっているということで，非常に伸びてきています。

このプログラムの特徴的なことの一つは，単位認定をされていることです。つまりうちの授業を全部受けると単位として認定されるんですよ。だから必ず生徒たちが最後まで受けなきゃいけないっていうのがプラス面あるんですね。だからその先生方と一緒に組んで，実績残せるところまでプログラム開発と実施ができていると思います。

ここでクレッシェンドというプログラムのことを少し話したいなというふうに今日は思っています。このプログラムというのは「出来ないからやってみたい」をテーマにしています。どういうことかというと，まず単位認定されているので，とにかくどんな生徒も来ます。つまり喋れない生徒とか目を合わせられない生徒とかですね，そういうかなりしんどい子たちが来るんですね。もちろん状態としてはやってみたいことなんてないわけですよ。やっぱりいじめとかいろんな高校中退とかして来ているので，自己肯定感も低いですし，状態としては人とあんまり話せない子もいます。ただうちのプログラムですね，長期間やっているので，その子たちをこのプログラム内で出来ないからまずやってみたいという想いを抱けるところまで持っていきます。9割の生徒が何かやってみたいというところまで持っていくことが実際できます。

もう少し具体的に内容をお話ししますと，社会人と大学生が関わるプログラムになって

います。コンポーザーと言われる社会人・大学生のボランティアもかかわるようになっています。現在 80 人のコンポーザーがいるんですけれども，その人達がプログラムで継続的に同じ生徒に必ず関わります。10 人の生徒が 1 クラスなって 8 人のスタッフとコンポーザーが関わります。コンポーザーとは，必ず面接をして選ばせていただいています。そのうえで，例えば発達障害についての知識を得たり，その人たちと関わりをもったりする研修を通らないとコンポーザーとなれない形式にしています。

それの採用基準というのがこの図で示しているところですね。1 つ目は「否定しない」というのがポイントです。2 つ目は「年下年上から学ぶ」というのがポイントです。3 つ目は「様々な職業やバックグラウンドから学ぶ」と。この姿勢を持っていない限りは絶対にこのコンポーザーというボランティアですけれども講師にはなれません。つまり変な人が来たら困るわけですね。たとえば「決めつける人」,「お前そんなんじゃ駄目だよ」とか言う人とかですね，押しの強すぎる人などは困るんです。だからかなり選抜してきて 80 人くらいの方がいます。この数もどんどん増えていっています。しかもその人達が長期間関わるようなプログラムだということですね。このコンポーザーというのがどういう人達かと言うと，本当に社会人が多いですね。職業がすごいバラバラで多様です。経営者の方とかもいます。

クレッシェンドはですね，3 ヶ月に 4 回のプログラムがあります。これは受講した生徒の感想ですね。ちょっと読み上げます。

第 1 回目を終えた瞬間に世界が 180 度変わったようになりました。私は中学校時代に不登校でした。ずっと大人の人に理解してもらえないと思っていました。D × P のプログラムは大人ばっかりが来ていて最初は緊張したんですけれども，でも話していく中で私達の高校生の立場と大人の人たちは変わらない。そこに何の隔たりもないということに気付かしてもらいました。

今日は，別にプログラムがすごくいいとか，そういう話をしに来たわけではなくて，とにかくこういった生徒の紹介というのをしたいと思います。あともう一人の感想を紹介します。

外に興味を持つようになりました。私は，6 年間不登校だったんですけれども，クレッシェンドに関わることで，他の分野でも動き始めることができました。

これはコンポーザーになったことでの感想です。実はリピーターがめちゃめちゃ多いんですよ。うちのボランティア講師は。もう2年以上続けている人もいます。

つまり設立当初から関わっている人もいるんですけれども，やっぱり大学生側から見ると「社会人とかかわったり，子どもの成長を見たりするのがやっぱり面白い」，と。継続的に関わっていくので変わっていく姿が見えるんですね。それなので非常にそれが面白いというふうに話をしてくれたりとか，社会人もですね，やっぱり「高校生たちの変わっていく姿っていう力の強さに圧倒されます」というようなことです。

プログラム内容は，簡単に1つ言いますと，クレッシェンドは4回の授業をやっています。1回あたり2時間半なので高校のコマ数にすると10コマ以上になります。1回目は「失敗体験談」です。挫折体験というのを社会人側から話してもらいます。ここに来ているボランティアさんというのは結構いろんな失敗談を持っています。たとえば自分が挫折体験として不登校だった，いじめを受けていた，つまり生徒たちと同じような経験をしてきた人たちが多いんですね。それなので，そこから今どういうふうに生きているかというところを話していくと生徒に響く。それで，とにかく自分たちでも出来るんだということを高校生たちに感じてもらうために1回目はそういうテーマにしています。最初は，生徒は聴く側ですけれど，3，4回目へとプログラムが進むと結構生徒側が話す形のプログラムになっていきます。あとで動画を用意してきているので，そちらでイメージをつけていただこうと思います。とにかく「出来ないからやってみたい」というのを4回でまず作るというのが，このクレッシェンドの特徴です。それと特徴として意識しているのは，これは併用してやっているところというのはたぶんない，あんまり大規模でやっているところって見られないと思うんですけれども，チャレンジプログラムも展開しています。これ単体で持っているところはたくさんあるんですけれども，繋げてやっているんですね。授業が終わった後には，とにかく生徒たちがやってみたいというものがたくさん出てきます。9割の生徒たちが何かやってみたいということが出てきます。これを実現させていくんですね。単以外になりますけれども，積極的に取り組む姿が見られます。

チャレンジプログラムでは，とにかく成功体験を作るために，出来たというところまで持っていくプログラムを持っています。たとえば，アート関係のもの。これはなぜかすごく通信制高校の生徒たちの想いと親和性が高いんですよ。アート系に。それなのでそういったそのプロジェクトに行ったり，企業のインターンをしたりですね。あとはゲーマーの子たちにはPCの研修講座とかですね，あとはいろんなサークル活動とかをもって学校を超えてサークル活動をやっているというところに参加するなど。大学のサークル活動や学生の様子を知ることが，進学につながったりしています。就職にもつなげていってやってい

るという形になっています。

企業インターンも，通信制高校の子たちの特徴を活かしていて実施しています。インターン先が多様です。島根県海士町，由布院，男鹿半島など全国的な展開になっています。つまりどういうことかというと，遠方へのインターンが長期間出来るんです，通信制高校だと。つまり学校にあまり通う必要がないので，たとえば週１回とか月１回の子たちというのは，「空き」時間があるんですね。だから長期間いろんな所に行けます。だから大阪の生徒が，大阪に半年間企業で働いている子もいれば，湯布院で研修している，男鹿半島に行っているというふうになります。インターンからアルバイトに移った子もいますし，そういうふうにどんどん企業のインターンというのをやっています。

その他，自分たちの自主企画でこういうふうにアート展をやったこともあります。あと出版に結びついたものもありました。そういうふうにしていって成功体験を積み重ねていくという形になっています。そうすることで学校での進学と就職率が高まります。8割まで持っていくことができました。

現在では，岡山県とか愛知県とか札幌とか東京とかですね，あと長野県とかですね，いろんな所から引き合いが来ています。この通信制高校や定時制高校でキャリア教育支援をするのは非常に珍しかったのですが，先生方も危機意識がすごく強いので少しずつ広がってきているのでしょう。公立高校からも事業の問い合わせが来るようになりました。

協力していただいている企業さんは40社ぐらいあります。こういうふうにいろいろな企業さんと一緒にやっているという形になっています。それでは，ここで少しだけですけれど話しているだけではイメージがつかないこともあると思うので，授業の中身とか生徒との話をちょっと映したいと思います。

【VTR】

ナレーション：今井さんのグループが支援を行っている通信制高校の授業。支援は生徒とほぼ同じ人数の社会人ボランティアなどを派遣し対話型の授業を行います。

今井：誰か一人でもいいので話せる人を作っていく，そうすることで先生と違った意味で他の人と話せるというか，この人だったらわかってくれるみたいな。そこから外の社会に興味を持ってもらうという意味ではかなり役割として大きいと思うので。

ナレーション：4回の授業のうちこの日は3回目。生徒も社会人ボランティアもお互いスケッチとともに夢を語り合いました。

社会人ボランティア：この場は別に誰もあなたのことを否定しませんので。

ナレーション：今の少子化の時代にあっても通信制の高校生は増加傾向にあります。その多くが不登校などの挫折を経験した生徒たち。目標をなかなか見いだせない中，年の近い大人たちとの交流で何かのきっかけが掴めないか。それが今井さんたちの思いです。

社会人：今，本当の夢はこんな感じで真っ白なんですよ。今はやりたいことがよくわからないというのが正直なところです。

社会人：僕が不登校だった時，親はすごく悲観的に僕のことを言いました。親には，もうあんたと一緒に死のうと言われました。でも僕はボロボロだったけど，通信制高校に行って友達ができて，少しずつ少しずつ自分を取り戻してやってきました。

ナレーション：社会人の側も正直にその思いを語ります。「できない」から「やってみる」へ

生徒：私は不登校だった。小3から中3，合計6年間私は学校に行っていない。その頃私は引きこもりであまり人と関わるのも好きではなかった。

ナレーション：今井さんの授業を体験した生徒は新たな歩みを始めています。

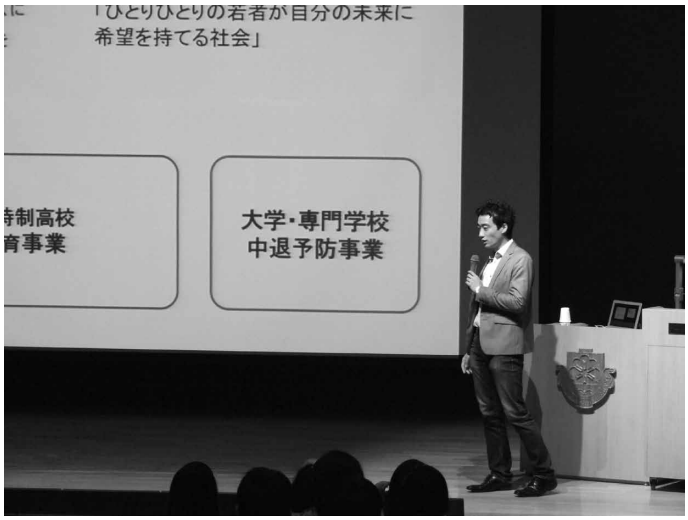
生徒：カメラの専門学校に入学して3年間みっちりと写真を勉強して，将来はプロのフォトグラファーになりたいなと思っています。

ナレーション：この授業では生徒と社会人は決して，上下「教える側」「教えられる側」の関係ではありません。

今井：年下の高校生が今何を考えているのかというところとか，それの引き出し役をすることで彼らとしても学んでいるというところもあると思います。

ナレーション：それぞれがそれぞれの次の一歩を模索しながら，語り合いの授業は続いていきます。

D × P 活動の意義と今後の展開



こういう感じですね。イメージがついたでしょうか。さっきは3回目の授業だったんですけれども，かなりフランクに話せる場をああいう形で作っています。特に何であれだけ社会人とかスタッフを配置しているかということですが，たとえばなんですけど通常の学校だったら教室内に生徒が複数に対して教員は一名です。それでもいいと思うんですけど。僕が，教員だとしましょう，高校の先生だと。僕が全員の生徒，100% の生徒を苦手だと思ってなかったとしても，生徒の中には僕のことを苦手だと思う生徒がいます。それはどんなタイプの生徒だと思いますか。どういう生徒が苦手だと思う？たぶんイメージがつきやすいと思うんですけど，静かな不登校を経験した女の子です。うるさいからです僕が。わかりますよね。たぶん苦手だと思うんですよ。熱い人のことはたぶん苦手だと思うんですよ。ある意味で，その子には僕はアプローチできないんですけど，それがですね，僕じゃなくて24～5歳の女の子だとすっと入っていけるんですよね。たとえば通信制とか定時制高校に行ったら余計そういう割合が増えるというか，つまり教員が苦手だと自分で思ってなかったとしても救える子の割合が減りうるんですよね。教員という立場にも限界があったりとかもするので，いろいろな人たちを多く配置していて，立場も人も別にしておいてセーフティーネットになるように，そこが回復の一つの入口になるんですね。

だから最初の一つの授業の中にかなり人を配置しています。教員の先生方とも役割を明確にしています。よく言われるのが，副担任だと僕らは言われますね。総合学習で違う情報を僕達が取ってくるんですね。それを教員の先生方とシェアして，この子どうやって対応していこうかみたいなところを話しているというような仕組みが今出来ていっています。だからチャレンジプログラムとかも。まだそこまで体系化できていないんですけれども，

「やってみたい」を実現させられるようになっています。

今後の展開なんですけれども，NPO 法人 D × P 本当に若い団体です。2012 年に法人化しましたから，まだ 3 年目です。それでも，ちゃんと食えていますし，一般企業並みの給料を払えているんですね。結構そういう意味では通信制とか定時制のこの分野で食えているところというのはうちしかないというか，そういう意味では結構うちも可能性を持っていると思っています。

それはありがたいですけれども，正直なところ通信制高校や定時制高校の問題が多いということですよね。やっぱり僕の場合は，昔の体験があるからだと思うんですけれども，僕は 18 歳の時に「自己責任」という区切られた場に立たされました。だから，先生方も頑張っていると思いますけれども，通信制高校や定時制高校の子たちは自律出来た立場だったんですけれども，それがやっぱり出来ていないことがわかるというか，問題点として見えてきます。だから，これをなんとかしたいと思って事業をしているんですね。

それを今後は全国的に展開していくために動いています。関西では来年たぶん滋賀まで広がります。兵庫県は堅くてなかなか難しい，奈良とかも。だから大阪・京都・滋賀とかに広げていきたいです。2016 年度には，そこから札幌とか東京どっちかに今支店を出そうとはしています。そして，定時制にやっぱり広げていくという形ですね。公立高校は課題が多いです。特に定時制高校の方はですね，

今日は全然話しませんでしたけれども，大阪なんですが，札幌もそうなんですけれども，3 割から 5 割とかが生活保護家庭なんですよ，生徒が。だからそういったその子たちが課題は，やっぱり多いです。何とかしたいなというふうに思っているので，進路未決定率も高いので，そこの分野にもどんどんやっていきたいなというふうには私達は思っています。

実は定時制高校にも入っていて，半年間の授業を使わせてもらって展開しています。このクレッシェンドを応用したプログラムですけれども。とにかく大切なのは若者支援というのはコストではなくて，未来への投資だということですね。教育は投資だというふうに言われます。仮にですね，通信制高校や定時制高校の子が結果的に進路未決定で生活保護を受けるようになれば，けっきょく国にコストがかかってしまうことにもつながります。その子たちをちゃんとやっぱり自立させていくことというのは，私達の責任なんじゃないかなと思います。そういう意味でも，未来への投資だと思うんですね。だからその部分はちゃんと私達側が考えていかなきゃいけない問題なのかなというのは個人的に思っているところです。

実は昨日，札幌の大通高校で 2 回目の授業だったんですけれども，5 人の方と一緒に生徒と関わってきました。少し端折りますけど，親との関係性の話とか金銭的な問題の話とか，

そういうのを具体的に生徒が経験してきたことを通して話してくれました。また，コンポーザーの側もたとえば自分が不登校だったり，自分が親と関係が上手くいかなくなったけれど，今はちゃんと上手くいったり，あと自分が鬱病だったけれども今仕事をしているとか話していたようです。そういう人たちに参加してもらって昨日の授業は組んできたんですけれども，本当にちゃんと生徒たちと話せることができました。午前部，午後部，夜間部全部ですね。

大学生にむけて

コンポーザーの人は，どんな体験であったとしても，たとえばさっき不登校だというふうに言いましたけれども，不登校の経験とか，自分が何も持ってないというふうに思っていたとしても，その体験が生徒たちにとっては価値になる可能性は十分にあるんですね。というか価値になるんですよ。だから自分は平凡だというふうに思わないでほしいなと思います。誰かの人生に実はあなたの語ることというのは響くことがあるんです。だから，そういう意味では誰かの力になるんです。どういう経験だったとしても。だから是非ですね，もし札幌でやる場合だったら長期間，関わっていただければなというふうに思っています。

大学生の方が多いのでちょっと伝えたいことなんですけれども，これは僕がアフリカに行った時の写真です。ザンビアで英語を教えていた時に，僕は逆に日本に関心を持つことになりました。そのことをふまえて大学生に言いたいことの一つは，とにかく一回興味がなかったとしてもやっぱり海外に行ってほしいです。あと日本の地方とかでもいいので。一回，自分が住んでいる環境から離れて，長期間たとえば一ヶ月間でもいいから動いてみるというのは，結構できます。体験が必要だと思うんですね。安かったりとか，ただで行けたりするプログラムもあるので，そういう所に応募してもらってどこか体験してきてほしいなと思います。

特に海外で，もし行くんだったとしたら，経済成長率の高い所に行ってほしいです。ザンビアは，今 8.5% です。しかも，めっちゃ安全です正直。インドよりはるかに安全です。意味わかんないかもしれないんですけど，夜歩けるんですよ。簡単に言うと。プラスすごいそういった国の勢いのある人たちのことが見れるというのが，すごく面白い。ザンビアは英語も通じるんで，ちなみに英語を喋れなくても行ったら何とかなるから絶対に行ったほうがいいですよ。ザンビアは，日本人が僕の行った当時は 76 人しかいなかったんで，貴重がられました。

日本に行くんだったら，地方に行ってみてください。結構今地方は仕事が足りてないから，若い人を欲しがっているんですね。たとえばこの間うちみたいな弱小 NPO に大槌町

とか鳥取の江府町とかから求人が来ます。今も具体的にその話が進んでいますけど，高校生を一ヶ月間送るとか，しかも住み込みでアルバイト代付きです。だから皆が行けないわけないです。だからそういう機会というのを是非僕みたいな人間でもいいですし，先生とかにも頼んでチャレンジしてみてください。人を頼ってみることって大切だと思うんですね。頼る力って絶対大切だと思うんですよ。というのは社会に出たら，絶対誰かと一緒に仕事しなきゃいけない，イコール頼るってことなんですよね。自分一人でできることなんて知れてるから。

だって僕ね，欠陥商品の塊ですよ，簡単に言うと。だって行動力はあるかもしれないけれども大雑把だから，スタッフが仕事してくれている。チームで仕事しているんです。だから自分一人でやろうなんて思う必要ないんですよ。だから頼ってほしいんですよね。頼るというのは，たとえばこういう海外とかどこか行く時とかあったとしても誰か頼ればいいんですよ。情報を持っている人から情報をもらうこと，そういう部分が大切だと思います。僕は，大学4回生になって初めて動き始めたしやりたいことが出来たのが26歳でした。みなさんは，僕よりもはるかに時間を持っています。きっとモヤモヤしている時期だとも思います。大学生の皆にとっては，特に1年生ですね。この時期というのはたぶん大学に来て「意味がわかんない」というか，「私良かったのかな」みたいな感じになってる時期だと思います，正直な話。だけど，結局それって動いてみるしか解決出来ないんですよ。時間が解決するケースもありますけれども，でもやっぱり動いてみて環境の変化によって自分が好きなものとか嫌いなものというのがやっぱり見えてくる。偶然によって結構変わるんですよ，だいたいいろんなことが。

たとえばどういうことが偶然かというと，僕はマラソンが好きなんです。3日前にも，36kmのトレイルランやってきました。山を7つ登って走ってきました。トレイルランをやり始めたのは4年前で，商社に勤めていたのですが，そこはある意味ブラックな企業で，ランチでハンバーガー10個とかシェイク6個とかを食べさせられて営業をするような会社だったんですよ。3週間それが続くんですよ。私の同期は鬱になりました。そういう会社だったんですよ。ある意味で酷かったんですね，あんまり嫌いじゃないですけれども，その会社のことは。それで太ったからマラソンを始めたんですよ。だからどういうことを言いたいかというと，最悪な経験だったとしても何か偶然のきっかけになるかもしれないんですよね。だから後から何かわかんないんですよ，そんなの。

だからそういう意味で言うと何がきっかけになるかわかんないから，とにかく行動を，誘われたものとか行ってみようよということです。そして，行ってみてから考えてみるというか，そこから悩めばいいので。なんかとりあえず動いてみるということを，ここに来

た大学生に言いたいんですけど，大切にしてほしいなというのが個人的に思っているところですね。

最後に，D × P のビジョンを話して終わります。「一人ひとりの若者が自分の未来に希望を持てる社会」というのがうちのゴールです。希望を持てる社会というのは，繰り返し言うんですけれども，どんな高校生とか若者，経済的な状況だったとしても若者が自分の将来を描ける社会というのが希望を持てる社会だと思うんですね。それをやっぱり作っていくために今の事業をしているので，高齢者の問題とかいろいろあります，確かに。それも大切だと思うんですけども，このD × P としてのビジョンを達成するために今は動いています。せっかく出会えたのですから，皆さんと一緒にできればなと思います。これからもよろしくお願いします。ありがとうございました。

司会：今井さん，どうもありがとうございました。

さて，最初にも申し上げましたけれども，一度ここで休憩時間を取らせていただきます。この間に質問票へのご記入もお願いいたします。皆様からみて舞台左手に小笠原先生，右手には私がおりますので，質問やコメントを書き終えましたら恐れ入りますけれどもご提出のほどよろしくお願いいたします。質問票をお書きいただくのに，もし筆記用具が必要だという方いらっしゃいましたらペンのご用意がございますので，申し付けください。

それでは，18 時 5 分まで，休憩とさせていただきます。それまでにお席に戻られますようお願いいたします。

質疑応答

司会：それでは，講演会を再開いたします。

これからは質疑応答とさせていただきます。まずは，たくさんの質問を寄せていただきありがとうございました。皆さんからのご質問になるべく多く答えていただきたく思いますが，時間も限られておりますのですべてを取り上げられないかもしれません。また，私が代読させていただきますこともあわせて，ご了承ください。

そうしましたら，今井さん，どうぞよろしくお願いいたします。

今井：よろしくお願いいたします。

司会：せっかくですので，どんどん行きたいと思います。

今井：全然かまいませんよ。はい。

司会：「NPO 法人で行っていくことの限界はないでしょうか。私は志の高い教育ビジネスがもっと増えるべきだと考えておりますが，その辺りのことについてお考えをお聞かせください」，とのことです。

今井：あのすごく難しい話を最初にたぶんするかもしれないですけど，NPO 法人の運営って結構難しくて NPO 法人はいろんなタイプの会社があります。というのも，フローレンスって皆さんわかります？あの病児保育をやっている駒崎さんという方が代表で，テレビにも出たりとか本とか出したりとか，すごく有名な会社があるんですね。そこは会社と同じく売上がすごく立っているんですよ。寄付型の NPO じゃなくて，事業収入がちょっと何割かまで覚えていないですけど，非常に高いんですね。社員も 150 人ぐらいいるんですよ。そういう高いところなんで，こういうところに関してはある意味で投資のお金っていうのは，自分たちの利益から出せるというのはあるかもしれないんですけれども，うちって 5 割 5 割ぐらいなんですよ，事業収入と寄付の割合というのが。そうなってくると，NPO って難しいのが借り入れ出来ないんですよ。出来ないというよりは少額なんですよ。たとえば財団から 300 万とか，あとは政策金融公庫というところがあるんですけど，そこから 300 万とかというところで，人を雇える金額ほどの借り入れはできない。実績が出てくると多少は，もっと 1000 万とかになるんですけれども，でもそれぐらいの金額だったら正直一人の投資って出来ないんですよね。だから正直事業を展開する上で非常に最近悩んでいます。そういう意味で言うと。NPO 法人って，だから最近少しずつ国の方でそういっ

た制度というのを変えようと思っているんですね。ちゃんと NPO でも借り入れを出来るような形にしようとしています。けれども，そういう意味ですごく事業としてはやりづらいので，発展しづらいです。

司会：今井さんの活動されている D × P は，2013 年にはビジネスプランコンペで受賞されたり，今年 2014 年 4 月には厚生労働省の社会福祉推進事業に採択されたりと，新規事業，起業の面からも注目されていますね。D × P の事業として，次へのチャレンジとかということのビジョンとかというのはお持ちなのですか？

今井：そうなんですよ。それがあるからこそ，さっき言ったとおり借り入れの方が結構問題になってたりとかしていて，お金の集め方が難しいんですよね。だからたとえば，すごい大量に寄付がたとえば来たとしたりとかあと売上が立ったとしても，その次の来年のためのお金っていうのを回せる金額っていうのが立てないというか，結構そういうのがすごい難しかったりとかするんですね。なので，計画とか目標を持っていて，もっとそれよりも上げようとしたとしても，そのための資金がないというのが課題です。ただ今は少しずつステップしているからいいんですけれども，一気に行きたい時にそれが出来ないというのが結構課題といえば課題ですね。だから NPO の経営は難しいです。すごい。

司会：当然 NPO 法人というのは非営利でなければいけないというところも考えあわせなければなりませんね。

今井：あんまり利益を出すわけにはいかないですよね。

司会:そうですよね。ビジネスとして展開していく時に大きな事業を考えていきたいと思っても，その資金問題がどうしても付きまとうというところでしょうかね。

今井：そうですね。本当にその辺が課題ですね。

司会：それでは，次に移ります。このような形式だと，話の展開がころころ変わるかもしれませんがよろしいですか。

今井：はい，大丈夫です。

司会:「大変エネルギッシュなお話をありがとうございました。今井さんのアクティブさは，どこで誰にいつ頃育まれたものでしょうか？今井さん自身の自己理解されていることを教えてください」，ということですが，いかがですか。

今井：行動力はたぶんある方だとは思います。自分でもこれは理解するところまでかかったのが社会人になってからなんですけど，自分の行動が良いというか良く捉えられるようになったのは社会人になってからなんですけれども。高校時代はとにかくがむしゃらに動いていて，僕は立命館慶祥に通っていました。本当に勉強が出来ない子で数学とか赤点をずっと取っている人だったんですね。だから最後卒業する時とか単位が足らなくて，学校にも行ってなかったので便所掃除っていうんですかね，単位をやるからとにかく全部の学校の掃除をやれと言われたぐらい酷かったんですよ。しかも高校も中退しかけています。それに，その当時やっていたことというのが今考えてみたら結構気持ち悪いなと思うんですけど，とにかく人目を気にせずに行動していました。たとえば僕高校の時に何をやっていたかというと，環境問題に関心がまずあったので，1年生の時に生ごみを一人で漁ってそれを土に変える運動を一人でやっていました。職員室の隣にある緑色のごみ箱が食堂から出てくる生ごみの所なんですけれども，校長から土地をもらってコンポーズをそこに入れて，生ごみをそこに大量に入れて土に変えてました。そういうことを勝手にやる人だったので，とにかく気持ち悪い高校生だったんですね。そういう人気持ち悪くないですか？絶対気持ち悪いと思います。僕は，高校3年間昼ごはんを食べませんでした。昼食代を浮かせてお金を貯めていたので。

とにかく疑問に思ったことに対しては納得がいくまでは行動するというか，今は歯止めがきくようになりましたけど，とにかく昔はそういうふうに人目を気にしなかったですね。とにかく僕のモットーとしては「やってみなかったらわかんない」というものだったので，そういう意味では行動力はあるとは思います。

疑問に思ったことはずっと考え続ける方の立場ですね。でも他は駄目ですよ。だから，駄目なところは，誰かと補いあっていけばいい。ある意味で良いか悪いかと思うのはやっぱり別です。だから自分で行動力なかったとしても，その行動力を補ってもらえば逆に良いというか，たとえば僕みたいな立場の行動力ある人間って，学内でもたぶんいると思うんですよね。そういう人にたとえばついてくとか，そういう人と一緒に何かをするとか，することによってその問題が解決されます。だからうちのたとえば高校の事業部長，事業を統括している者がいるんですけれども，僕と真反対で行動力はないんですけど，真面目に仕事をするんですよね。だからちょうど合っているというか，だから別に自分が行動力

がなかったとしても別に良い話なので，そこはネガティブに捉える必要はないです。

司会：はい，ありがとうございました。
　そうしましたら続きまして，学生の将来の進路のことについて，2件を合わせてご紹介しますが。

今井：進路ですか。

司会：はい。
「もやもやしている3年なんですが・・・」

今井：もやもやしている3年なんですか。

司会：はい，3年生ということでしょうね。

今井：だいぶ限定されてきますね。

司会：「まだたくさんのことにチャレンジしても良いと思いますか。それともそろそろ何か一つに決めた方がいいんですかね。就職をと焦っているような，いないような感じです」，というふうなことですね

今井：なるほど。

司会：そして，もう一人の方からです。
「私は韓国から来た留学生ですけれど・・・」

今井：おー，韓国なんですね。

司会：はい。
「今井さんがおっしゃったとおり，韓国から出てここでいろんな体験をしています。」

今井：すばらしいですね。

司会：「でも今少しだけ迷っている感じですけれど，この後自分の道を探す時もっと良い選択が出来る方法があったら教えてください」，ということですね。

今井：なるほど。

司会：ですから，もやもやしながらいろいろ考えて行動している人と，そうやって出てきた，ここ日本札幌に来てくれた留学生ということですが，2人ともそろそろ何かに決めたいと思っているのだけれど，どうしたらいいか何かアドバイスを下さい，ということでしょうね。

今井：でも，決めれますかね，そういうのって。結構決まらないですよね。たぶん先生もそういう経験とかもあると思うんですけど，就職活動とかで動くというのは全然良いと思うんですけど。自分の方向性っていくつになってもあんまり決まらないというか，そういう人の方が多いと思います。やりたいこと，さっきテレビの動画にも出ていましたけれども，結構皆わからないと思うんです。ただ，迷いながらも，とにかく自分の目の前にあることをやっていくというのは，大切かなというのは個人的に思っているところですね。プラス大学の3年生でもやもやしてるということで，一つ参考になる事例がありました。この間，僕のところにFacebookで熊本の学生から連絡がありました。その人は，「今井さんと，教育関係に興味があります。就職活動は失敗したのですが，ちょっといろいろ疑問があってその就職活動が納得しなかったから，ある意味でほとんど受けなかったというふうに言っていて，来年1年間休学するので1年間D × Pで働かしてください」ということを言ってきました。

面接をこれからするので，実際彼が来るかどうかわからないのですけども，結構面白い子だったんですね。結局のところ自分で決めるのは自分で決めることで，もやもやしているのは良いと思うんですけれども，そういうふうにもやもやしている中で新たな選択肢をする子もいれば，全然やりたいことないまま就職を決めていることもあります。僕は後者でした。だから自分として何が合うかなというのは，人との話の中とか自分の考える中で見出していって決めていってほしいなと思います。誰に何が合うかというのはその人に聞いてみないとわからないので，ここでは言えないんですけれども。本当に自分に合った道というのを結局自分で決めていくことが大切だと思います。

韓国の方に言えるのは，うちはAPUだったので韓国の友達めっちゃ多かったんですね。韓国人だけで600人ぐらいいるんですよ。すごく多いですよね。やっぱり日本にこれだけ来ていて，やっぱりすごいなと個人的に尊敬しています。APUにいた韓国人の子たちは

ほとんどだいたいが流暢に日本語を喋っていました。プラス英語も喋れていましたね。とにかく優秀でした。質問してくれている人も日本に来るぐらいなので相当優秀だと思うので，是非日本の企業にもし勤めたいと思うならそこでも良いかもしれませんし，韓国だったら今たとえばフィリピンに行く子もけっこういると思います。あと最近だったらベトナムとかの進出している韓国の企業は，わりと多いと思うのでそういう所に行ってみても良いんじゃないかな，というふうには個人的には思っています。チャレンジする舞台というのはたくさんあると思うので，どこでも何でも行ってみると良いんじゃないかな，というのは個人的には思っているところですね。はい。

司会：はい，ありがとうございました。そうしましたら次です。

「ザンビアの子どもより日本の子どもの方がまずいと思った理由を教えてください。」

それともう一つ似たようなものがありました。

「世界的にやばいことが起きていることを知った経緯，行動に至るまでの心情をお聞かせください」，ということで似たようなところかなとは思うのですが，いかがでしょうか。

今井：なるほど。まずザンビアの話でいくと，ザンビアはですね，というかザンビアという国を知っている方いらっしゃいますか。あ，知っている人もいますね。行ったことありますか？ないですよね。

すごくマイナーな国でしょう。南アフリカの上の上ぐらいですね。たぶんわかんないかもしれないですね。結構大きな国なんですけど，人口が1100万人ぐらいで平均寿命が46か7かな。ちょっと昔のデータなので覚えていないですけれども，小中学校で英語を教えています。学校の増築の仕事をしていた時に彼らと接した時に思ったのは，彼らの方が自分たちの国に対して未来を持ち，希望を持ち，プラス自分たちの将来に対してすごい前向きだった。というか，ほぼ全員がそうだったんですね。

高校生のうちの3分の2が自分の将来に対して希望を持ってないというデータもありますよね。たしかそれぐらいだったと思うんですけれども。そういう状態だったので，日本に帰って来てから，これは日本の方がまずいというふうには直感的にすごく思って，自分としてもやっぱり似たようなその経験というか，そういう子たちが多かったのがやっぱり日本だったと思うので，それで日本に対して関心を持ったというのがすごいありました。

もうひとつは，問題の関心を持ったきっかけという感じですよね。

何を問題に感じるかというのは，たぶん人それぞれだと思うんですけど，僕の場合は

ですね，単純化して言うと 9.11 のテロが結構大きかったですね。ちょっとこれはかなり端折って言うんですけど。9.11 のテロがあったのは，僕が高校 1 年生の時だったんですね。あの事件があって，「世界ってなんだろう」と考えました。そして，あの事件があった直後に起こったのは，10 月 7 日なんだけれども，10 月 7 日にアフガニスタンの空爆というのが始まりました。関係のない国に空爆を始めていったんですね。あまりにも，というか無差別に，しかも人々を殺していった。「あれは良いのかな」という最初疑問があって，問題意識を持っていました。それから，かなり戦争と平和の問題に対して考えるようになりましたね。僕の場合はそういう問題意識はすごい昔は強かった，昔も今もだと思うんですけど，強かったかなというふうには思います。

やっぱりなんていうんですかね，結構世界というのは脆いという前提が僕の中であります。変わりつつある社会というのをどう捉えるかというのを結構いつも考えているからかもしれない。そういうふうにいつも思っていますね。ちょっと答えになっているかわからないですけど。

司会：それでは，次にいきます。

「今の時代，いろいろ大変な思いをしている子どもたちの背景に親との関係の問題もあると思います。今井さんの経験の中で，親との関係で苦労した子どもさんの例や，それを何らかの解決に導いた例などあればお聞かせください。」

今井：いろいろあるんですけど，親との関係性の問題というのは，よく聞く話ですね，これは一つの事例で言うと。定時制高校とか通信制高校で仕事をしていると，たとえば生活保護家庭だと，親は働いていないことがあります。だから，子どもが自分でお金を貯めたいと思ったり，何とかしたいと思ったりして，たとえば月 6 ～ 7 万稼ぎます。それでも，そのうちのほとんどを親に取られてしまう。お母さんとかのパチンコ代とかになるという話は聞きます。本当にそういう意味では大変ですね。子どももそれにずっと従っているという状況です。今，二十歳で大学に通っている子がいるんですけれども，生活保護を受けたりとかすると大学に進学が出来ないということがあるんですね。お母さんから反対されていてみたいな。そこでその子は，世帯分離をした。つまり家族を分けたという事例があります。僕は，その選択はやって良かったと思うんですけど，学校の先生方とも相当相談して，本人とも相当話したんですけど，本人が希望しているのにやっぱり行けなかったというのが非常に大きかったので，それで分離したらお母さんも生活保護を受けられるので，それで話し合ってやっていったとことがありましたし，それは難しい課題でしたね，正

直。そういうこともありました。親との関係で悩む子は本当にたくさんいると思うんですね。すごいくあると思うんですけど，これ昨日の大通高校でもすごく話してたんですけど，ちゃんとやっぱり言うことは言った方が良いというか，あのー

司会：それは親に対して自分の思いをぶつけるというような意味合いでしょうか。

今井：そうですね。やっぱりその部分で理解されなかったとしたら，じゃあどうやってその部分で説得するかというか。あと正直な話，たとえば海外に行くことは親が許してくれないとかというケースあるじゃないですか。たとえばこの間僕が言われたケースは，アフリカに行きたいという女の子がいたんですけれども，でも親はやっぱり許してくれないという。危険だと思っているから，と。でも安全な国なはずなのに行けないというのがあったんです。なんていうんですかね，本当に自分でやってみたいと思うんだったら，これは本当に個人的な意見なんですけど，やっぱり挑戦はしていった方がいいんじゃないかなとは思っています。やっぱり自分の人生なので後で，結局「お母さんのせいで出来なかった」というふうに他人のせいにしてしまうということが起こってしまうんだったら，どうなのかなと思ったりとかもするんですよね。

だから個人的に学生にすごく言いたいのは，「判断は任せるけれども，ちゃんと自分の言いたいことを言ったほうがいいよ」ということはちゃんとは言っていますね。昨日も５人のゲストがいて，親年齢の方もいたんですけれども，その方も「やっぱり子どもから言われて初めてわかった」とおっしゃっていました。こういうことも親からしたらあるみたいだったので，そういうのもちゃんと考えて自分たちで行動したほうがいいんじゃないかなと思います。

あと一つ言えるのは，もし親子関係が悪かったら離れてみるのも一つの選択肢です。たとえばうちのケースでいくと，うちの兄は昨日一緒に授業をしてくれたんですけれども，うちの兄，鬱病だったんですよ。僕の事件の影響で仕事なくなっているんですね。８年間，相当仲が悪かったんですけれども，２年前ぐらいから回復しました。関係性が。それは時間と距離があったからです。距離を取らないと家族関係って修復しないケースがあります。たとえば，これは僕もよく見るケースなんですけれども，通信制定時制の子で自宅から通っていて，仲が悪いケースです。一回離れた方がいいケースはたくさんあります。やっぱり，離れてみて初めてお互いわかることも多いです。だから，離れてみるという選択肢も入れる，環境が変化させることによって周りが全部変わるので，それによってやっぱり気付くことも多いです。だから，もし親との関係性で悩むことが，障壁になっているんだったら，

やっぱりそこは自分で考えて行動したほうがいいと思います。

司会：そうしましたら，次です。
「これから先，全日制の学校で授業したりとかは考えていますか。」

今井：全日制は1校だけ今特別でやっています。全部で半年間請け負いました。ただ，全日制で何故やっていないかというと，一つ難しいのがデイタイム，平日の昼間に授業をしなければならないなんですよね。通信制は土日授業できます。夜間定時制は夜授業が出来るんですよ。社会人が仕事終わった後7時半からとか。だから社会人とか大学生の方々と一緒にやれますけど，全日制の課題は社会人をあまり動員できないことです。それを企業さんと協力してこの間は10人派遣してもらっています。半年間毎週一回ずっと授業をしてきました。10人の社員さんと一緒に。そういうようなこともやっているので，可能性としてはあるんですけれども。それでも，やっぱり集中してやっていくのは課題が多いですね。

司会：続きまして，「今NPOとして活動しているが，今後もずっと続けるか」，ということですが。

今井：NPO法人はD×Pとしてはやっていくつもりなのと，あと新規事業がいくつかあってですね，それでもしかしたら一つだけ分離させて株式会社を作るかもというのはありますけれども，D×Pをやめることはないですね。

司会：それでは，次です。
「大学生であってもコンポーザーには参加できますか。」

今井：できます。19歳～39歳まではいけます。親年齢で区切っていますね。ちなみに42～3で例外的に参加された方もいます。本当に参加したいという方で，一回話し合ってみて参加されるという方もたまにいます。その制限年齢を超えていても。

司会：この続きのようですが，「コンポーザーはどのように選ばれていますか。本人の希望，もしくは面接。若い人にとってはこの出会いがとても大切だと思います。このような出会いが少なすぎると思います」，ということですが。

今井：コンポーザーに関しては先ほど言ったとおり面接があるんですね。面接で結構落ちる方もいらっしゃいます。というのが人数の応募が多かったりとか，あと本当にさっきの基本三姿勢にそぐわなかったりするので，それでちょっと落ちる方もいます。基本的にもっと受けていきたいなというふうには思っているので，ちょっと今後の今の課題ですね。大学生でもなれるし，今後増やしていく形にすると思います。

司会：そうしましたら，あと二つで終わりたいと思います。
「自分の考えを持って行動する今井さんにとって，考えを持っていても行動しない人というのは偽善者だと思いますでしょうか。また，今井さんの中で善と偽善の定義のようなものがあれば教えてほしいです」，ということですが。

今井：問題意識を持っていて行動しないということが偽善者ということですか。

司会：そうですね。考えを持っていても行動しないと。行動できないということなのか，行動しないということなのか。

今井：めちゃめちゃ難しい質問ですね。

司会：そうですね。偽善というかどうかって，質問者の人がどういうふうに善と偽善を持っているか，という前提も確認したいところかもしれないですけど。

今井：なるほど。まず偽善だとは思わないですね。ただその出来ない理由にもよると思うんですけど，まあでも役割もあります。役割というか，たとえば貢献の仕方だと思うんですよ，簡単に言うと。自分で行動することがいいと思えば，たぶんそれでいいと思うんですけれども，自分が別にそれに携わらなかったとしてもそれを知っている人の応援の仕方というのはありますよね。たとえば僕今５団体の寄付者なんですけど，たとえば「かものはしプロジェクト」さん，カンボジアに子どもたちが売られる状況があると，その子たちを売られない状況を作るために「かものはしプロジェクト」さんというのは仕事をしています。それを応援したいがために僕は寄付をしているんですね。毎月に。マンスリーサポーターになっているんですけれども。そういうようなこともできるし，関わり方の問題かなというには個人的に思うので，自分でそれにちゃんとやりたいんだったらやってもいいと思うし，もしその問題意識を持っていてやれないんだったら，違う参加の仕方をするとい

うことを選択肢に入れるだけでいいと思います。

司会：はい。そうしましたら最後です。

「将来やりたいことやビジョンが思い浮かびません。それはどうすれば見つかりますか。またそのような人に対してどのような助言をしますか」，ということです。

今井：やりたいことがないのは当然だと思いますね。いいと思います，正直やりたいことがないというのは。まず，やりたいことを持っている人間というのは前提として少ないです。しかも，なんていうんですかね，だからもし仮に自分で見つけたいと思っているんだったら，さっき言ったとおり偶然を掴むというか，やっぱり飛び込んでみたりとか何にも関係のない所にある意味で飛び込むのも一つの手です。関係のない所に飛び込むのも一つの手。たとえば僕に言ってもらったら，「海士町のインターン先とかを紹介できます」とかね。島根県の島に流されるわけですよ。あとたとえば由布院の旅館とかに飛ばされるわけですよ，あなたは。で，そこからもしかしたら何か生まれるかもしれないです。だからそういうところに案外飛び込む，やりたいことがないと思っているのなら飛び込んでみて。

あと一つ言えるのが仕事って面白いですからね。めちゃめちゃ。何かだからやってみるといいと思いますよ。バイト感覚でやっている人っていうのは，バイトは確かに自分でコントロールできる範囲というのはすごく少ないので，仕事としては結構1年くらい経ってると面白くなくなるかもしれないんですけれども。でも自分で，たとえば自分が仕事を作れたりとか自分で進められるようになってきたりとかすると，すごい仕事が楽しくなるので。お金のために40年間仕事するのってつまんないじゃないですか。絶対に。たとえば22歳で就職して，僕らの世代はたぶん75ぐらいまで働くと思うんですけど，わかんないですけど，そうしたら50年ですよね，50年間つまんない給料のために働くのですかという話なんですよ。給料のためにですよ。だからその部分で面白さっていうのはたぶんいろんなところに見つけられると思うんですね。それをなんか今のうちに見つけていてもいいんじゃないかなと思うので飛び込んでみるのはありかなと思います。

司会：はい，ありがとうございました。

取り扱えなかったご質問もあります。また，いろいろなケースの質問を受けていただけたので，それに対してもまだまだ触発されてお伺いしたいということもあろうかと思います。それでも，すでに予定時間を超過したこともありますので，質疑応答はここで終わらせていただきたいと思います。

先ほどの講演の中にもございましたが，今井さんの受け答えされる姿勢にも「否定をしない」というところが見受けられましたね。

今井：ここってちなみにまだ開いてるんですか？ここの会場って開いてるんですかね？

司会：講演会終了後ということですか？

今井：あと 10 分くらいここに残るのでもし質問があったら。

司会：なるほど。会場を閉めるまでの間，個別にも質問を受けてくださるということですね。承知しました。あと，もう一つこちらのご案内をされるのではなかったですか？

今井：そうですね，連絡先を書きましたので，何か困ったというか相談したいとか，質問したいということがあったら連絡いただけたらと思います。

Twitter よりも，たぶん質問するんだったら Facebook の方がいいかなと思うんで，Facebook だったらメッセージをください。そうじゃないとたぶんわかんないと思うんで。

メールだったらこのアドレスでやっていただけたらなというふうには思います。はい。よろしくお願いします。

司会：そうしましたら，これをもちまして，質疑応答は終了させていただきたいと思います。お時間が許す限りということになりますけれど，あと 10 分ぐらいまででしたら，こ

ちらで質問を受けていただけるそうですので，もし何かありましたら直接今井さんにお声掛けください。

今井さん，ありがとうございました。

（拍手）

最後に閉会のご挨拶をいただきたいと思います。濱田先生よろしくお願いいたします。

濱田：今日は限られた時間ではございましたけれども，非常に有意義な時間を過ごさせて頂きましたことに感謝いたします。今井先生には本当に忙しい中，ご講演頂きましてありがとうございました。また，本学の講演会に学外の方々もお越し頂きましたことに感謝申し上げます。今日の今井先生の色々な実体験あるいはNPOとしての活動をお伺いして私自身が強く感じましたことは，「生活する」ということと「生きる」ということは表面的には似ていますが，実は全く違っているということでした。学生の皆さんも今日のお話しから沢山のことを学んだことと思いますので，是非，自分の中で消化していただいて，これからの学生時代に活かし，自分の人生をどう生きるかを考えてほしいと思います。

今日はどうもありがとうございました。

（拍手）